

派遣研究員

氏名	俞 鳴奇
所属	歴史民俗資料学研究科 博士後期課程
派遣期間	2018年1月10日～2018年1月30日
派遣先	中山大学 中国非物質文化遺産研究中心
研究課題	中国沿岸漁民の海洋知識と利用に関する研究 —GPS 発達以前の定置網漁業を例として—



中国沿岸漁民の知識と利用に関する調査報告

俞 鳴奇

はじめに

現代においてはGPS (Global Positioning System) や、北斗衛星導航系統 (BeiDou Navigation Satellite System) などを利用して海上での位置を測定できるが、GPSなどの機器がなかった時代、海上での方向や位置をどのように判断したのか、航海に関する文献を読むことで、その一端がわかる。古くは羅針盤を使用して、島や星などを見ながら、海上での方向と位置を判断していた。文献上では主に遠洋航海時に記録した方向と位置を判断するもので、近海での位置の判断についての記録は少ない。また、魚群探知機を利用して、魚群の位置を判断できるが、魚群探知機がなかった時代、どのように魚群の位置を判断したのか。このことから、文献記録から海洋知識を調べるには限界がある。具体的に漁民の知識と利用方法について、フィールドワークや漁民への聞き書きなど民俗学の手法に基づいた、研究を行う必要があると考える。

筆者は非文字資料研究センターの派遣研究員として、中国・広州にある中山大学非物質文化遺産研究センターを訪問し、中国沿岸漁民の海洋知識とその利用状況についての調査を行った。調査地は中国沿岸の南部に位置する海南省鶯歌海鎮と、中南部に位置する福建省平潭県、そして北部の山東省青島黃山村の3つの漁村を選定した。この3つの漁村においては、漁労技術と産業構造はそれぞれであり、漁師の海洋知識と知識の利用状況を深く調査する必要があると考える。したがって、まず調査地の漁業の現状を把握し、また漁師への聞き取り調査を行った。本稿ではこの3つの地域の漁師の海洋知識

と利用状況について報告を行いたい。

1 鶯歌海鎮の定置網漁

鶯歌海鎮は、海南省の南西部に位置する漁村で、海南省樂東黎族自治県に属する。西と南の地域は海に面していて、北部湾と呼ばれており、ベトナムとの国境に隣接している。北東は、尖峰嶺という山側に面していて、黎族が住んでいる。鶯歌海には耕地が少なく、漁業が主な産業である。現在は漁船が約300隻あり、主に牽風漁業、流し網漁業、定置網漁業、釣り漁、集魚灯を用いる5種類の漁法が行われている。

今回事例として挙げる定置網漁業は、近海での潮流に乗って、魚群が集まる海域で、網を海底の一定の場所に固定して魚を獲る漁法である。「符氏家譜」によると、康熙年間(1662-1722年)に瓊山県沙上村の符氏の顯祖葵と礼の2人が鶯歌海鎮に移住し、その後、鶯歌海鎮地域で定置網漁業を始めたとある。後世葵と礼の2人が定置網漁業を行っていた海域を「老符落」という。

聞き取り調査によると、潮流の知識を把握していることが定置網漁において非常に重要である。海南省の漁民たちは潮汐と海流を流水という。なぜ流水の知識が必要かというと、まず流水がある時期に海域の魚がたくさんくるため、流水がない時期は定置網漁を行わないという。また、定置網漁では網に入った魚を獲る時間が重要である。流水がある時間は、網が海に沈んでいるため、海面からは見えず、網は重くて揚げられない。したがって網中の魚は流水がなくなる1時間しか獲ることができない。





●写真 1 漁獲物を仕分けしている様子



●写真 2 平潭県の「厝」

漁民は先祖や自身の経験から専門的な潮汐の知識について学び、潮汐の状況を判断している。漁師からの聞き取った内容を以下のようにまとめた。

(1) 毎月2回の流水があり、1回は約10日間にわたる。流水が始まる時を新流といい、また終わる時を老流という。1回目の流水と2回目の流水の間の10日間は流水がなく、無流水という。毎月流水が始まる時間は異なり、流水が始まる時間を表にまとめている。

(2) 流水がある10日間は、大体毎日2回の流水があり、昼間に1回、夜に1回ある。昼間は南へ流れ、夜は北へ流れる。ただ、流水が1日1回の場合もある。毎日流水が始まる時間は異なり、流水が始まる時間については『鶯歌海誌』、『崖州誌』の中で記録されている。

定置網の位置を判断する方法について、私は2015年と2017年に、海南省の鶯歌海鎮で2回の調査を行った。鶯歌海鎮は300年前から定置網漁業を行っている。鶯歌海鎮の船ではGPSを使用してからまだ30年も経っていない。それ以前は、夜間に、陸地上の2つの目印を基準とする方法と、北斗七星と海面との角度を測る方法の2つの技術で定置網の位置を判断していた。

今回は、位置を測る方法を調査した。まとめると、3つの方法がある。1つは、陸地の2つの目印を重ね合わせ直線に沿って航行して、一定の時間を経て網の位置に着く方法。2つは、海から見える陸地の2つの目印に形成した特定の角度を確認して、自分の網の位置を判断する方法。3つは、星や月の位置によって網の位置を判断する方法である。例えば、ある漁師は、海に出て船から見ると月の位置が変わっている。特定の距離を移動すると、自分の網の位置に着くと話していた。

II 平潭鎮の刺し網漁

平潭鎮は、福建省内でもっとも大きな島であり、福州

市に位置しており、7つの鎮と8の郷を有している。この島には、昔から残っている「厝」という伝統的な建物がある。「厝」とは石で建てられた家である。海風を防ぐことができ、冬は暖かく、夏は涼しいのが特徴である。石材は当地から産出している。平潭鎮では非常に優れた掘削技術を持っている。これは中国全土でも有名であり、それゆえ、中国全土のトンネル工事のほとんどが平潭人によって行われている。昔は、島人が船で島と大陸の間を往復していたが、現在は、島人の生活の利便性を上げるため、それに加えて、観光業を発展させるために大橋が建てられている。当地の産業については、昔は、刺し網漁業と海上運輸業が主だったが、現在はイガイの養殖が盛んである。

平潭鎮に属する国彩村のある漁師へのインタビューを通し、昔に行っていた刺し網漁について知ることができた。1970年代から1980年代頃は、機械船ではなく、人力で櫓をこいで木造船を動かし、漁に出ていた。一般的に、1つの船には7人が乗る。船尾でかじをとる船頭は一番偉く、その次には、「船老二」という櫓をこぐ3~5人のチームをリードする役割の人がいる。それに、棹を差す人と網を張る人が1人ずついる。刺し網の大きさは小さいもので6、7メートルあり、大きいもので十数メートルもある。通常は海底に固定されているが、急流によって水の流れとともに移動することもある。

天候と潮を観察しながら、魚がいる場所を探して網を張る。例えば、6月、7月頃の、日がまだ沈んでいない、だんだんと暗くなってくる夕方に、網を張るのが一番いい。その上、旧暦の毎月18日に、潮が引くのは5時頃で、涼しくなると魚が出てくる。また、暗礁に魚が集まっている。そして、彼はある刺し網漁の経験話を話してくれた。夜の3時頃、ほかの漁師たちがみんな仕事を終えて帰った頃、彼も片付けてそろそろ帰ろうと思っ





●写真3 黄山村風景

ていたが、潮が東頭岩まで引く時、海岸がまだ幅2メートルぐらい見えることに気づいた。それにより、そこには魚の群れがいるということを意識し、網を張ることを決めた。結果的に、2300キログラムにも達する漁に恵まれたという。

III 黄山村のクラゲ漁と遠洋漁業

黄山村は山東省青島市嶗山区に位置し、嶗山を背にし、嶗山湾に面している。現在は全ての村でクラゲ漁、ホタテ貝養殖、アワビ養殖と茶業を、主な生業としている。70年代～80年代にかけて、浙江省と江蘇省のあたりの漁場まで出漁したことがあり、「南洋へ下り」（下南洋）と呼ばれた。クラゲ漁は地元の人からは「打海蜇」（クラゲを漁する）と呼ばれ、黄山村には、クラゲ漁の歴史を明らかにした記録はないが、村の90代の古老によると小さい頃からクラゲ漁をしていたという。

もともとは筏でクラゲ漁をし、その後木造船を使い、それから動力船に変わっていった。クラゲ漁は通常旧暦の6月15日から8月までの間にかけて毎日行われ、1日4回行う。クラゲ漁では特製のクラゲ網を用いる、網の長さは20-30トウ⁽¹⁾（1トウおよそ160cm）で、高さは15、6トウある。クラゲ網でクラゲを捕まえてから、タモでクラゲをすくいあげる。船中でクラゲの頭をただちに取り除き、陸地に着いたらすぐに加工する。クラゲ漁の場所は海岸より近くて、肉眼で見え、20馬力（1馬力はおおよそ745.69ワット）の小型木造船で30分くらいの距離である。クラゲ漁は満潮と干潮の方向によって網を撒くという。

漁民たちは若い頃南洋に下り、サワラ漁をした経験を

話してくれた。その時はほとんど帆船であり、まだ動力船がなかった。7、8人乗りの船で、青島から浙江省や江蘇省あたりへサワラ漁に行った。帆船にとって適切な風が大切なので、北風の時に南洋へ下り、南風の時に青島に帰る。1年に2回、1カ月あまりの漁期であった。その時、海の方を判断した方法は、羅針盤であり、晴れた時に北斗七星を見て方向を決めた。風波が強くていかりを降ろせない時に、船は波に流され海に漂い、あるいは近くの港で風当たりを避けた。また船に海水の深さを測る「掂水砣」と呼ばれる道具がある。南洋へ下る途中で5つの座礁しやすい浅瀬があるため、その「掂水砣」で海水の深さを測ったという。浅くなった時に座礁しないよう、遠海の方へ行ったという。

まとめ

現代の科学技術とともに、漁民は伝統的な技術を未だ使用している。しかし、現代の若い漁師は伝統的な技術と知識を把握していない。伝統的な技術を知っているお年寄りの漁師が亡くなると、この技術と知識が伝承されないという危機的状況にある。今後このような漁民が持つ技術や知識の記録と研究が重要であると考えられる。

参考文献

- [1] 莺歌海志編撰委員会編・莺歌海志 [M] . 海南：南海出版公司、2014.
- [2] 故宫博物院編・乾隆 崖州志、陵水县志、昌化县志 [M] . 海南：海南出版社、2001.

(1) 地元の人のお話によれば、両手を伸ばした長さは1トウである。



现今有 GPS、北斗等精准的仪器进行定位，还有探鱼器，雷达等可探知鱼群。而在这类技术发展之前人们通过哪些方法进行定位，渔民们又利用哪些知识进行渔业捕捞。相关研究通常是通过对海道针经，航海日记，地方志等历史文献来进行研究。但其中都是关于远洋航行中的定向定位技术，没有关于近海的渔业捕捞的定位的研究，近海作业是否也用相同的技术，值得探讨。其次，研究多从文献的角度出发，而渔民们真正所掌握的知识和技术，未必都记录于文献之中，所以这次利用去中山大学非物质文化遗产中心学习的机会，一是收集一些文献资料，二是从民俗学的角度对渔民进行实地的访问调查。

调查地点选择了中国沿海的南部（海南省莺歌海镇）、中南部（福建省平潭县）、北部（青岛市黄山村）的三个渔村。三个渔村都有着不同的作业方式和产业结构。关于渔民的海洋知识及其利用研究还需具体分析渔民所在渔村的渔业捕捞状况和捕捞经历。所以这次调查报告首先介绍调查地的渔业状况，再结合渔民的访问调查结果，简单总结这三个区域渔民的海洋知识及其利用的状况。

莺歌海镇的定置网作业

莺歌海镇位于海南省西南部，东经 108.73 度，北纬 13.5 度，属海南省乐东黎族自治县，西、南面环北部湾与越南隔海相望，东北背靠尖峰岭。全镇总面积 24 万平方公里，辖 4 个自然村，7 个居委会，海域 586 万公顷，水深 80-200 米。莺歌海镇是个渔业镇，农耕地少，全镇现有各种渔船 300 多艘，渔民在禁海期间也从事其他工作。莺歌海主要有 5 大捕捞作业方式及 23 种网具，其中牵风作业 1 种，流速网作业 11 种，定置网作业 2 种，钓鱼作业 4 种，灯光捕鱼作业 2 种，绞缯、地拉网、白袋网 3 种。

定置网作业是将渔网固定在海底某一位置，等鱼进入网中再收网的一种捕鱼作业方式。根据符氏家谱记载，康熙年间（公元 1662-1722 年）原籍琼山县沙上村符氏葵礼二位显祖来崖莺歌海安基，为符氏迁来莺歌海之始祖，从此之后莺歌海便开始了定置网作业。后人将符氏葵礼公从事定置网作业的海区称为“老符落”。

在调查过程中，渔民们谈及定置网作业必定说到“流水”的问题。当地所说“流水”即海流与潮汐的变化。“流水”会带来鱼群，所以“流水”对捕鱼非常重要。当地渔民并未学习过关于潮流的专业知识，凭借辈辈相传的经验，总结出了莺歌海地区“流水”的规律。根据渔民描述，莺歌海的流水每个月有两次，每次十天。每一个流水

都是从弱渐强再由强渐弱。大部分时间每天也有两次流水，白天一次，晚上一次，白天流南，晚上流北。有时候一天只有一次流水。

“流水”对定置网作业的重要性还体现在下网与收网的时间的判断方面。一是根据月流水情况决定什么时候可以进行定置网作业，二是根据日流水情况决定何时出海收网。每天的两次流水中间只有 1-2 个小时的时间是无流水，只有这个时候才能找到渔网收到鱼。若有流水，则渔网再海中看不见，即便找见也因太沉无法拉起。只有无流水的时候才能看见渔网。

关于如何寻找定置网的方法，根据渔民的描述可以分为三种。一种为渔船沿着陆地上的两个标志物形成的一条直线航行，利用航行时间和船与直线的相对位置来估算渔船行驶位置从而寻找渔网位置。一种为渔船在海上航行时参照与陆地上两个参照物间的夹角，利用之前渔网与这两个参照物的某个固定夹角，来确定渔船及渔网的位置。一种为利用天体变化的规律，通过不同时间段天体的方位来判断渔网位置。

渔民提到以上三种定位的方法都是通过相应的标志物来确定方位，每个渔民的定置网位置都不一样，所利用的参照物或者参照物的角度也不同。同时渔民也提到有时因风浪大或者流水过急，也有找不到渔网的情况。这也说明“流水”的情况有时会影响到渔民们在收网时方位的判断。

平潭县的缯网作业

平潭镇是福建省内最大的岛，属福州市，有 7 个镇 8 个乡。之前岛内的房子都是用石头盖成的石头房子，可防海风，冬暖夏凉，当地人称为“厝”。盖房子的石头都在岛内的山上用炸药炸开再加工而成。也因此，当地人打隧道的技术也是全国有名，很多隧道工程基本都是平潭人在负责。在没有通桥之前，岛内人都是坐船才能到福州。近几年为方便人们生活以及发展当地旅游业，开通了跨海大桥。以前捕鱼以及运输业较发达，捕鱼主要用缯网捕，现在当地以养殖淡菜为主，捕鱼较少。

在对渔民的访谈中，国彩村的一位渔民提到了以前关于缯网捕鱼的经验。七八十年代，大家还用没有动力需要摇橹的小木船出海捕鱼。那时一艘船上基本有 7 个人，在船尾掌舵的人一般是船老大，其次是橹头，船老二。摇橹需要很大力气，一般三五个人一起摇。还有一个人负责撑篙，一人负责下网。缯网小的有六七米，大的十多米，一般是固定在海底的，有时候水流急也会随着水流在海里移动。



需要看天气，看潮水来判断哪里有鱼可以下网。比如六七月份太阳快要落山，天快要黑的时候，这个时候下的网是最好的，鱼都是结群出来的。还有比如十八的潮水，退潮到下午五六点时，天开始变凉快，鱼就出来了。还有就是石头（暗礁）旁边会有鱼。他还提到自己的一次用缝网捕鱼的经历。有一次半夜三点左右，大家都收网回家了，他也准备回家，看见潮水退到东头岩的时候，后面的沙滩还能露出两三步，他就断定这里肯定有鱼群，决定在这里围一网鱼。结果果真收获颇丰，围了46担（4600斤左右）。

收网时也有技巧，快到海滩时，浪推着船，橹会翘起来使不上劲。这时需要靠篙来控制方向，用篙一撑把船推向岸边。到了岸边需要30个人左右来拉鱼网。

黄山村海蜇捕捞与远洋捕捞

黄山村位于山东省青岛市崂山区，背靠崂山面朝大海。现在主要以海蜇捕捞养殖扇贝、鲍鱼和茶叶种植为主。在70年代80年代时，曾去浙江，江苏一带捕过鱼，当地人称为“下南洋”。

海蜇捕捞当地称为“打海蜇”。黄山村打海蜇的历史没有明确的记载，但是村里90多岁的老人说在她记事开始就打海蜇了。之前用木筏子打海蜇，后来才有了木船，又加上了动力。一般从阴历六月十五开始打海蜇到八月份，天天打，一天打四回。打海蜇是用特殊的海蜇网，长二三十托，高十五六托⁽¹⁾。用网把海蜇围住以后，再用捞子把海蜇捞上来，在船上就要把海蜇头拔掉，运到陆地上就要开始加工。打海蜇的地点很近，从陆地上能看见，二十马力的小木船大概跑半小时就到了打海蜇的地方。打海蜇是

需要根据涨潮退潮的方向下网。

渔民提到年轻时“下南洋”打鲅鱼的经历。那时一般都是帆船，没有动力船。一个船上有七八个人，从青岛出发去江浙一带打鲅鱼。因为是帆船必须等合适的风才行。北风时节下南洋，南风时节回青岛，一年去两次，每次需要一个多月。那时出海一般看指南针判断方向，天气好的时候也看北斗星。遇到风浪大时不能抛锚，要让船只随着浪漂，或者赶紧找个避风港。还有一个工具叫“掂水砣”，用来测量海水的深度。因为下南洋有五条沙，遇到沙滩时容易搁浅，所以要用“掂水砣”测量海水的深度，若是海水比较浅，就要赶紧往远洋跑，以防搁浅。

总结

通过这次对三个不同地方渔村的调查，发现关于渔民的海洋知识及其利用的研究需要再具体问题具体分析。有着不同经历的渔民，其所利用的知识也不一样。但也可从中找到一些共同点，比如捕捞作业，一般都需要掌握潮汐，天气方面的知识。远洋捕捞的话，还需要掌握如何辨别方位，判断凶险的知识。这次的调查对我毕业论文写作有着非常大的帮助。

参考文献

- [1] 莺歌海志编撰委员会编. 莺歌海志 [M]. 海南：南海出版公司，2014.
- [2] 故宫博物院编. 乾隆 崖州志，陵水县志，昌化县志 [M]. 海南：海南出版社，2001.

(1) 托：当地人把成人两臂伸开的长度称为一托。

